

興味・関心を持たせる文法指導の工夫

— 1年「文の組み立て」の学習を通して —

目 次

I	テーマ設定の理由	125
II	文法指導の考え方	126
1	文法指導のねらい	126
2	文法指導の方法	126
3	取り立て指導の必要性	126
III	小中の指導内容の系統と関連	127
1	学習指導要領における系統	127
2	教科書での取り扱い	128
(1)	小学校の文法系列	128
(2)	小中の指導内容の関連	131
IV	指導方法の工夫	132
1	学習過程の工夫	132
2	学習資料の工夫	133
3	評価方法の工夫	133
V	学習展開の実際	134
1	教材名	134
2	教材設定の理由	134
3	生徒の実態	134
4	指導目標	135
5	指導計画	135
6	本時の授業展開例	136
7	資料①～⑥	138
VI	研究の成果と今後の課題	144

<主な参考文献>

浦添市立浦添中学校教諭

宮 城 康 子

興味・関心を持たせる文法指導の工夫

— 1年 「文の組み立て」の学習を通して —

浦添市立浦添中学校教諭 宮城 康子

I テーマ設定の理由

中学生の「文法嫌い」が言われるようになって久しい。私の教室でも「次は文法の学習」と聞いたとたん、生徒達の顔にはつまらなさそうな表情が走る。高校受験をひかえている3年生ともなると、不安気な色さえ見せる。「文法」と聞いて新鮮さを感じ興味を示すのは、やはり1年生である。しかし、その1年生も学年の終わり頃には、ほとんど関心を示さなくなる。さらに、そのおもしろくない理由を尋ねてみると、次のような返事が返ってくる現状であった。

- 内容が複雑なので説明を聞いても難しい。
- 覚えなければならないことが多すぎる。
- 理解できないうちに授業が進む。
- 勉強しても何の役に立つかわからない。

また、昨年12月、中学2年生を対象に実施された「全国標準学力検査」の分析に携わった。その中で、文法事項では次のような結果が出ている。

- 基礎的な力の定着が弱い。(述語、修飾語の理解、単語の類別など)
- 正答率の平均が28.5%と低い。全国との差は-7.6%である。
- 無答率が平均22.3%と高い。

上記の実態からも改めて、指導方法を改善していく必要があることを痛感した。生徒達の声聞くまでもなく、これまでの授業を振り返ってみると、解説が多く生徒が自ら考える場がなかったことに思いあたる。また、文法の指導は小学校からすでに始められている。しかし、それが「どのような内容で、どの程度、どのような方法で」行われているかについては全く認識不足である。したがって、小学校での既習事項も確認しないまま、体系的な指導を急ぐあまり、文法事項の暗記学習になってしまっていたのではないか。このようなことが興味・関心を失わせ、必要性を感じさせない学習になってしまっている原因であろう。

そこで今回は、生徒にとって「内容がよくわかる授業」であることが、興味・関心を持たせていくことにつながるのではないかと考えて次のような手だてを試みたい。

- ① 小学校での既習事項をおさえ、基礎的な指導内容として一貫性を持たせる。
- ② 実態をふまえた段階的な指導方法を工夫する。
- ③ 生徒が自ら考える場を設定できるような学習過程と資料の工夫をする。

以上のことを実践していくなかで、興味・関心を持ち、「文法は役に立つもの」という意識が芽生え、基礎的事項の定着ともなっていくのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 文法指導の考え方

1 文法指導のねらい

学習指導要領での国語教育の目標は「国語を正確に理解し、適切に表現する能力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め、国語を尊重する態度を育てる。」となっている。これをうけて、国語の理解と表現に役立てるための指導内容として〔言語事項〕の分野が設定された。文法事項はその中の一つである。国語の理解力・表現力を支える基礎的な文法力を養うのが、そのねらいと言える。また、論理的な思考力や言語感覚を育成するためにも文法感覚は欠かせない力となる。さらに、国語に対する認識や国語を尊重する態度も日本語の特質や法則性について学ぶところから育成されていくものと考えられる。

2 文法指導の方法

(1) 理解・表現活動を通して指導する。

指導要領に「理解と表現に役立てる」とあるように具体的な理解・表現活動を通して身につけさせることが大切である。形式的・断片的な知識ではなく、表現や理解に生きて働く文法力の養成が求められている。

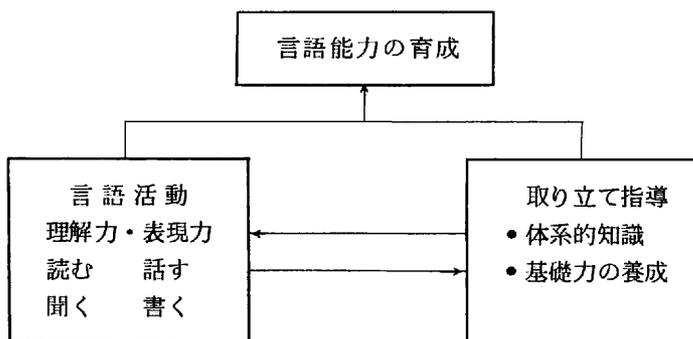
(2) 文法事項を取り立てて指導する。

文法事項を理解・表現活動から切り離し、取り出して系統的・段階的に指導する方法である。

3 取り立て指導の必要性

指導要領ではその内容の取扱いにおいて、「国語の特質を理解させるために、ある程度まとまった知識を得させる」指導方法の工夫が要求されている。文法事項は体系的なものであり、まとまった知識を得させるためには、文法事項のみを取り出して指導する必要があると言える。読解過程や作文指導の過程で行う文法学習は、そのままでは断片的になりやすく、機会的である。系統性や段階性は持たせにくい。そこで、特に重要な基礎的事項を取り出し、体系的知識として身につけさせることが取り立て指導のねらいである。しかし、取り立て指導で得た知識は知識のみに終らせない指導がまた重要であろう。そこで得た知識を日頃の言語活動の場に戻し、表現力や理解力の基礎として生きて働くように定着化させていくことが必要である。

そこで、文法指導のねらいと取り立て指導との関係は下記の図のように考えられる。



Ⅲ 小中における指導内容の関連と系統

1 学習指導要領における系統

指導項目 校種・学年	語句の性質・品詞	文 構 成	文章構成・指示語・接続語		
小 学	一 年	(イ) 一つ一つの語句の意味や使い方について関心をもつようにすること。	(ア) 文の中における主語と述語との照応に注意すること。		
	二 年	(イ) 語句の性質や役割に関心をもつこと。 (ア) 身近な事物とのかかわりから、反対や対照的な関係の意味を表す語句などに気付くこと。	(ア) 文の中における主語と述語の関係及び修飾と被修飾との関係に注意すること。 (イ) 文や文章の中における指示語や接続語の役割と使い方に気付くこと。		
	三 年	(イ) 語句には性質や役割の上で類別があることに気付くこと。	(ア) 文の中における主語と述語との関係及び修飾と被修飾との関係を理解すること。	(イ) 文や文章の中における指示語や接続語の役割と使い方に注意すること。	
	四 年	(イ) 語句の性質や役割について理解し、類別ごとの特質が分かること。	(ア) 文の構成について初歩的な理解をもつこと。	(イ) 文と文との意味のつながりを考えながら、指示語や接続語を適切に使うこと。	
	校	五 年	(イ) 語句に関する類別の理解を深めること。	(ア) 文の中で語句の係り方や照応の仕方を理解して、いろいろな文の構成があることを理解すること。	(イ) 文と文との意味のつながりを考えながら、指示語や接続語を的確に使うこと。
		六 年	(ウ) 主語と述語を結びつけたり、これらの語を助けたりする語句などの働きに気付くこと。	(ア) 文や文章にはいろいろな構成があることについて理解を深めること。	
中 学 校	一 年	オ 単語の類別について理解し、指示語や接続詞及びこれらと同じような働きをもつ語句などに注意すること。		エ 文章の中の段落の役割や文と文との接続関係などを考えること。	
	二 年	オ 単語の活用について理解し、助詞や助動詞などの働きに注意すること。	エ 文の中の文の成分の順序や照応、文の組み立てなどを考えること。		
	三 年		ウ 文の中の意味の切れ目と続き方などを考えること。	エ 文章の展開の仕方や文章のまとめりかたなどを考えること。	

2 教科書での取り扱い

(1) 小学校の文法系列（教育出版平成2年度版「言語コラム」を中心に）

ア 文の組み立て

項目 学年	言語コラム	学習用語	指導内容
一 年	*文をつくりましょう	<ul style="list-style-type: none"> 文 文の終わり まる(○)(句読) 	<ul style="list-style-type: none"> 基本文型 ～が～ます。 ～に～ます。 ～は～を～ます。 ～は～に～を～ます。 主・述の照応に気づかせる。
二 年	*文のくみたて	<ul style="list-style-type: none"> 文の形 いろいろな形の文 	<ul style="list-style-type: none"> 基本文型 ～に～を～ます。 ～が～ます。 ～が～を～ます。 存在認識の文型（～があります）
四 年	*文の組み立て	<ul style="list-style-type: none"> 文のほね組み 何(だれ)が 何(だれ)を 何(だれ)に どうする, ある どんなだ, 何だ 主語, 述語, 文図 	<ul style="list-style-type: none"> 基本文型 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <div style="display: flex; align-items: center; gap: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">何が は</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">どうする どんなだ ある 何だ</div> </div> </div> 主語, 述語の役割の理解 文図の書き方
五 年	*文の組み立て	<ul style="list-style-type: none"> 言い切りの形 続く形 並べてのべる文 つなぎ言葉 (原因, 仮定, 逆) 	<ul style="list-style-type: none"> 単文, 重文, 複文の組み立て 主語+述語 (単文) 主語+述語+主語+述語 (重文) 主語+(主語+述語)+述語 (複文) 並列の重文, 接続助詞の用法
六 年	*言葉の順序と表現の ちがい	<ul style="list-style-type: none"> ふつうの文 倒置の文 言葉の順序 	<ul style="list-style-type: none"> 倒置文の組み立てと用法 語順の変更による表現効果の違い

イ. 修飾語

二 年	*くわしく する ことば	<ul style="list-style-type: none"> くわしくする言葉 	<ul style="list-style-type: none"> 連体修飾語の働き どんな → 何
三 年	*くわしくする言葉	<ul style="list-style-type: none"> くわしくする言葉 どんな どのように くわしくせつめいするはたらき 	<ul style="list-style-type: none"> 連体修飾語の働きと用法 連用修飾語の働きと用法 どんな → 何 どのように → どうする

項目 学年	言語コラム	学習用語	指導内容
四年	*修飾語	<ul style="list-style-type: none"> •修飾語 •くわしくする言葉 •文図 	<ul style="list-style-type: none"> •修飾語の働き 主語に係る修飾語 述語に係る修飾語 •文図の書き方

ウ 接続語・指示語

三年	*文をつなぐ言葉	<ul style="list-style-type: none"> •文をつなぐ言葉 だから それで しかし けれども それに また または それとも 	<ul style="list-style-type: none"> •接続詞の働き, 種類, 用法 順接 逆接 並列 累加 対比 選択
四年	*こそあど言葉	<ul style="list-style-type: none"> •こそあど言葉 指でさすような はたらき さすものをたずね るはたらき 	<ul style="list-style-type: none"> •指示語の働き, 種類, 用法 •指示内容のとらえ方 •こそあどの体系

エ 単語の類別

五年	*単語のいろいろ	<ul style="list-style-type: none"> •単語の種類 名詞, 動詞, 形容詞, 助詞 •使い方によって形が 変わる(活用する) •形の変わり方 	<ul style="list-style-type: none"> •単語の種類と性質 •品詞 名詞, 動詞, 形容詞, 助詞 •活用 動詞, 形容詞
----	----------	---	---

オ 助詞

二年	*いろいろな文	<ul style="list-style-type: none"> •いろいろな形の文 •ただしい文 •おかしい文 •文をつなぐ言葉 	<ul style="list-style-type: none"> •助詞の働き, 種類, 用法
六年	*意味をそえる助詞	<ul style="list-style-type: none"> •意味をそえる助詞 ～だけ ～ほど ～しか ～さえ •意味をつけ加える はたらき 	<ul style="list-style-type: none"> •副助詞の働き, 種類, 用法
	*「は」のはたらき	<ul style="list-style-type: none"> •「は」のはたらき 取り立ててのべる 対比してのべる 	<ul style="list-style-type: none"> •副助詞「は」の働きと用法 •強調の効果

カ 助動詞（文末表現）

項目 学年	言語コラム	学習用語	指導内容
三年	★おしはかる言い方	<ul style="list-style-type: none"> おしはかる言い方 はっきりとわかっていることを表す言い方 	<ul style="list-style-type: none"> 助動詞の働きと用法 断定（ます） 推定（らしい、ようだ） 推量（でしょう）
四年	★「ふるそうだ」「ふりそうだ」	<ul style="list-style-type: none"> 聞いたことを伝える言い方 様子をおしはかる言い方 「そうだ」の続き方がちがう 	<ul style="list-style-type: none"> 助動詞の働きと用法 伝聞（そうだ） 様態（そうだ） 動詞への続き方 伝聞→終止形+そうだ 様態→連用形+そうだ
五年	★受け身の文、使役 <small>しえき</small> の文	<ul style="list-style-type: none"> 受け身の言い方（動作を受けるものを中心にした言い表し方） 使役の言い方（だれかがほかの人に何かをさせる言い方） 受け身の文の仕組み（動詞に「れる、られる」をつける） 使役の文の仕組み（動詞に「せる、させる」をつける） 	<ul style="list-style-type: none"> 助動詞の働きと用法 受け身（れる、られる） 使役（せる、させる） 動詞への続き方 受け身→未然形+れる、られる 使役→未然形+せる、させる

キ 副 詞

五年	★前もって気持ちを示す言葉	<ul style="list-style-type: none"> 前もって気持ちを示す言葉 おしはかる気持ち（たぶん～でしょう） ぎもんの気持ち（はたして～でしょうか。） 仮定の気持ち（もし～たら、） あとにきまった言葉をとる。 	<ul style="list-style-type: none"> 陳述の副詞の働きと用法 推量（たぶん、おそらく、きっと） 疑問（はたして） 仮定（もし、仮に、たとえ） 願望（どうぞ） 打ち消し推量（まさか） 副詞の呼応の意味
----	---------------	---	---

(2) 小中の指導内容の関連（光村 平成2年度版「文法指導教材」を中心に）

先の(1)であげた小学校の指導内容は、中学校の段階になると、次の表のようにある程度まとまった知識として体系づけられた指導内容になっていく。ここでは、「文法指導教材」を中心にした取り立て指導の系統として位置付けた。文と文とのつながり及び段落相互の関係を含む「文章構成」の指導については、表現・理解の教材をとおして機能的に行われるようになっていく。

指導の関連	小学校の指導内容	中学校の教材・指導内容		
	1～6年の系統	1年	2年	3年
文 構 成	ア 文の組み立て ・文 ・基本文型 ・文の骨組み ・主語、述語 ・文図 ・重文、複文 ・倒置文 イ 修飾語 ・連体修飾 ・連用修飾 ・文図 ウ 接続語 ・接続詞	文法1 文法を学ぶ ・学ぶ意義、学習内容 ・文、文節、単語 ・文章、談話、段落 文法2 文の組み立て(一) ・文節と文節との関係 ・文の成分 主語、述語、修飾語、接続語、独立語 文法3 文の組み立て(二) ・並立、補助の関係 ・連文節 ・文の成分の順序		文法1 文の組み立てを考える ・述語に係るまとまり 連文節 連用修飾語(部) 連体修飾語(部) 文図 ・組み立ての複雑な文の骨組みをとらえる ・組み立ての整わない文 ・意味のあいまいな文
語 句 の 性 質 ・ 品 詞 ・ 指 示 語 ・ 接 続 語	エ 単語の類別 ・名詞 ・動詞 ・形容詞 ・助詞 ・活用 ウ 接続語指示語 ・接続詞 ・こそあど言葉 キ 副詞 ・陳述の副詞 カ 助動詞 ・断定、推量 ・推定 ・伝聞、様態 ・受け身、使役 オ 助詞 ・副助詞 ・「は」の働き	文法4 単語のいろいろ ・自立語、付属語 ・活用の有無 ・単語の働き(文の成分) ・単語の類別(品詞)	文法1 体言と用言 ・体言の種類 ・用言の種類 ・動詞、形容詞、形容動詞の活用の種類 ・形式用言(補助用言) ・他動詞、自動詞	
			文法2 副詞・連体詞・接続詞・感動詞 ・副詞の種類と働き ・連体詞の種類と働き ・接続詞の種類と働き ・感動詞の種類と働き 文法3 助動詞 ・助動詞の種類と働き 文法4 助詞 ・助詞の種類と働き	文法2 副詞・接続詞の働き ・副詞の働きと用法 ・接続詞の働きと用法 文法3 助動詞・助詞の働き ・助動詞の働きと用法 ・助詞の働きと用法

IV 指導方法の工夫

1 学習過程の工夫

(1) 生徒の実態をふまえた授業の改善

文法学習に対する生徒たちの実態をふまえ、指導方法の改善点を下記のように考えた。

(生徒の実態)

- 学習内容が複雑で難しい。
- 覚えるものが多すぎる。
- 理解できないうちに授業が進む。
- 何に役立つのかわからない。
- 基礎学力の定着が弱い。

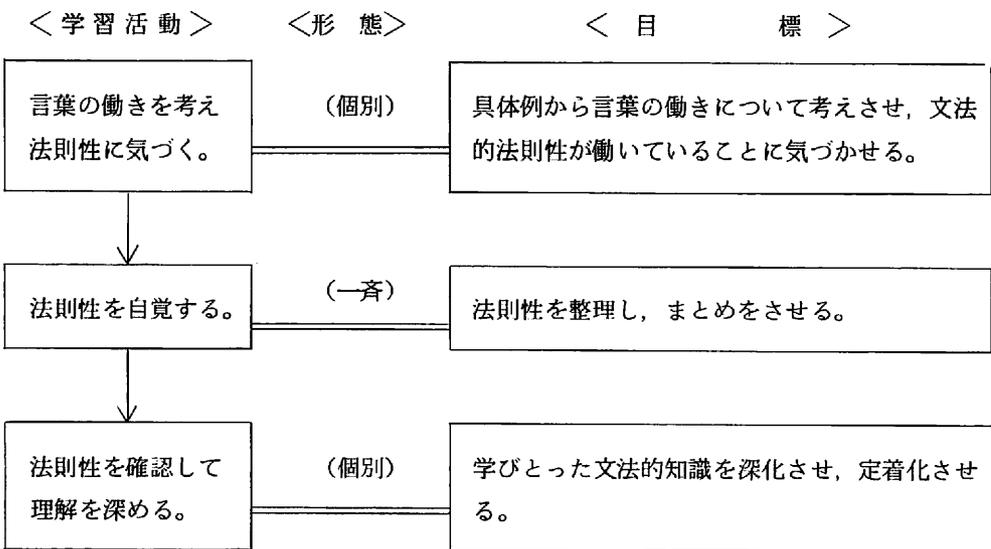
(授業の反省点)

- 解説が多く生徒が自ら考える場がない。
- 一時間に学習する内容が多い。
- 教科書の解説だけではわかりにくい。
- 指導の手順が段階的ではない。
- 文法用語の暗記学習になっている。
- 既習事項がおさえられていない。

「内容がよくわかる」授業にするための改善点

- ① 小中の文法指導の系統化を行い、指導内容に一貫性をもたせる。
- ② 基礎的・基本的事項を精選して指導計画を立てる。
- ③ 実態調査等を行い段階的な指導手順を工夫する。
- ④ 生徒が自ら考えることができる学習課題を設定する。
- ⑤ 理解を助ける学習プリント等の資料を工夫する。

(2) 一時間の学習の流れの工夫

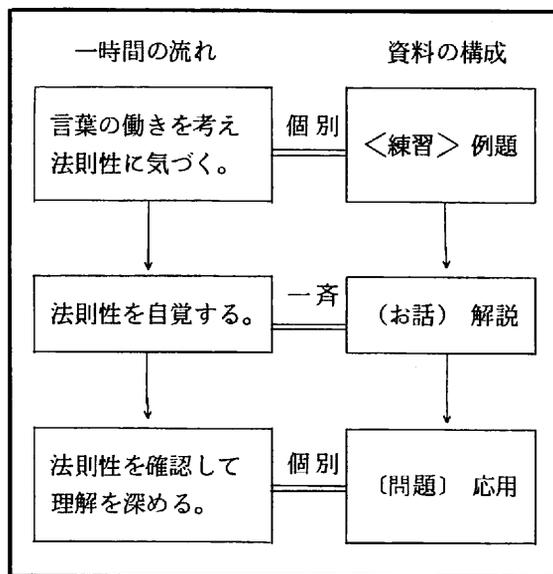


2 学習資料の工夫

図① 資料の構成

(1) 学習プリント作成の観点

- ① 学習課題を明確にする。
- ② 基礎的・基本的事項が精選され、基礎的な力が養える。
- ③ 解説がわかりやすい。
- ④ 例題・練習問題が効果的で親しみやすい。
- ⑤ 一時間の流れに即した構成にする。
(図①参照)
- ⑥ 学習終了後のフィードバックが容易にできる。
- ⑦ 授業後は個人用ファイルにつづらせ、文法ノートとして活用できる。



(2) カードとTPの活用

解説→練習の繰り返しは、ともすれば単調になってしまいがちである。そこで、生徒の視覚に訴えて学習内容のイメージ化を図り、興味関心を高める工夫も必要である。その手だての一つとしてカードとTPの活用を試みたい。

① カード

文型・文節の指導、文の構成・語順指導などでは、黒板上・机上での操作がしやすく効果的である。

② TP

生徒に配る学習プリントの中の課題や練習問題を提示したり、学習のポイントを示したりして時間の効率化を図る。

3 評価方法の工夫

(1) 学習前の評価……小学校あるいは前学年の基礎的事項について事前テストを行う。

- ① 生徒の実態やつまずきの傾向を把握し、指導計画作成に役立てる。
- ② 生徒一人ひとりのつまずきの具合や学力を知るための資料とし、個別指導に役立てる。
- ③ 前学年の内容の復習の役目を果たし、今後の学習理解を助け、意欲を高めることにもつながる。

(2) 学習中の評価……学習中の様子を観察するとともに、まとめの小テストを行う。学習プリントを回収し、記入状況を点検する。

- ① 次時の学習展開の改善に役立てる。
- ② 生徒一人ひとりの習得状況を把握する。

(3) 学習後の評価……教材終了後に学習事項の総括的テスト、中間・期末で基礎的項目の総合的テストを行う。

- ① 指導目標に照らした到達度を把握し、補充学習計画に役立てる。
- ② 生徒一人ひとりに弱いところを自覚させ、フィードバックをうながす資料とする。

V 学習展開の実際

1 教材名 文法2 「文の組み立て(一)」

2 教材設定の理由

中学に入って生徒たちが初めて出会う文法教材が、「文・文節」の学習であり、「文の組み立て」の学習である。ここで、「文の組み立て」については小学校の段階で、次のようにある程度系統立てられた指導がなされてきている。

- 低学年 主語・述語の照応と修飾・被修飾の関係
- 中学年 主語・述語・修飾語の用語と働きの理解
基本文型の意識と文図の書き方
- 高学年 重文・複文の組み立て

しかし、これはあくまでも表現・理解単元に付随した取り扱われ方である。したがって、生徒たちはかなりの文法的知識を身につけてはいるだろうが、それは断片的知識であろうと思われる。中学の段階ではそれを再度、体系的に整理し、表現・理解で生きて働くようにすることが必要であろう。また、口頃何気なく使っている言葉について改めて考えさせ、一つ一つの言葉のもつ大きな働きに気づかせ、それを学ぶことの大切さを知らせたい。

文・文節・文の構成の理解は、今後の文法学習の基礎・基盤をなすものである。文法入門期のこの時期にはできるだけ「文法嫌い」をつくらないようにすることも大切であろう。そのためには、できるだけ平易な解説、わかりやすい構文・例題を中心に学習を進める配慮をしたい。生徒たちに「これならわかる」、「文法はやってみたら簡単だ」という実感を持たせたいと考え、この教材を設定した。

3 生徒の実態

(1) 小学校の既習事項の実態調査テスト結果から

生徒たちの文法学力を把握するため、小学校での既習事項について「言葉のきまりテスト」を行った。その結果は次の通りである。

(対象 1年生3クラス 117名)

	項目	観 点			正答率	誤答率	無答率
		何が	何を	何に どうする			
①	言葉の役割	何が	何を	何に どうする	96	3	1
②	基本文型	何が		どうする	89	11	0
		何が		どんなだ	51	49	0
		何が		ある	89	11	0
		何が		何だ	56	44	0

ア 文の骨組みとなる言葉の役割については、ほとんどの生徒が理解している。

イ 基本文型では形容詞文と名詞文の区別が弱い。

③	主語の理解	単 文	91	8	1
		重 文	79	20	1
		複 文	26	73	1

④	述語の理解	単文	92	7	1
		重文	54	44	2
		複文	42	57	1
⑤	修飾語の理解	はたらき	77	22	1
		連体修飾	69	31	0
		連用修飾	50	50	0
⑥	文図の書き方	主語・述語・修飾語の関係	31	68	1
⑦	複雑な文構成	骨組みの文の作成	32	51	17

ア 主語・述語とも単文の段階での理解はよいが、重文・複文になると正答率が低く、つかめない生徒が多い。

イ 修飾語の働きはほぼ理解されている。連体修飾の関係の理解は高いが、連用修飾関係は50%前後である。特に修飾語と被修飾語が離れた位置にあったり、連文節の修飾語になっていたりする連用修飾関係の理解が弱い。

ウ 文図の書き方が定着している生徒は30%程度である。修飾関係が離れた文の図示は、ほとんどが理解できていない。

エ 複雑な文では、その骨組み部分「何が・何に・何を・どうする」から、修飾語をはずし、文を組み立てる力が弱い。

⑧	接続語の用法	接続詞	91	6	3
		接続助詞	90	6	4

ア 簡単な構文での接続詞の使い分けは理解されている。長い文になると、文と文との意味内容のつながりをとらえきれないことからくる誤答がめだつた。

イ 接続助詞の使い分けも理解されている。しかし、仮定・逆接の意味をともなった語への付属のさせかたでは誤答がめだつた。

(2) 中学での既習事項の実態

① 文法学習について

「文法1 文法を学ぶ」の学習と「言葉のきまりテスト」を終えたあとのアンケートでは、難しい、やや難しいと答えた生徒が半々であった。

② 「文」に対する理解

文法的な意味での理解は79%ができていない。句点で区切るという意識の定着も弱い。また、文と文章の区別がつけられない生徒が多い。

③ 「文節」の句切り方

簡単な構文では77%の生徒が正確に区切ることができる。

4 指導目標

(1) 文は文節と文節との関係によって組み立てられていることを理解させる。

(2) 文を組み立てている5つの成分(主語・述語・修飾語・接続語・独立語)の働きについて基礎的な理解をさせる。

5 指導計画

第1時 「言葉のきまり」テストを行い、生徒の実態を把握する。

文と文節について基礎的事項を確認する。

第2時 主語・述語の関係について理解させる。

基本文型について理解させる。

- 第3時 修飾・被修飾の関係について理解させる。
連体修飾語の働きについて基礎的な理解をさせる。
- 第4時 連用修飾語の働きについて基礎的な理解をさせる。
- 第5時 接続語・独立語の働きについて理解させる。
- 第6時 文の成文のまとめをする。
「力だめし」テストを行い、定着度を把握する。

6 本時の授業展開例 (第2時)

- (1) 本時の目標
主語・述語の関係と基本文型について理解させる。
- (2) 展 開

指 導 事 項	学 習 内 容 と 活 動	留意点・資料
◇課題の確認をする。	<p>1 学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ●主語・述語の働きについて考えてみよう。 ●「主語・述語をもつ文の形」にはどのような種類があるか考えてみよう。 </div>	●資料②学習プリントを配る。
◇文節にはその意味によって、果たす役割があることを確認する。	<p>2 文節の役割について確認する。</p> <p><練習1> 次の文を文節に句切り, 下の()にあてはまる文節を書き入れましょう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>弟が僕にいきなりボールを投げた。</p> </div> <p style="text-align: right;">①何が() ②何を() ③何に() ④どうした() ⑤どのように()</p> <p>3 「何が」・「どうする」の働きをする文節を見つける。</p> <p><練習2> 次の文からA「何(だれ)が」B「どうする」にあたる文節を抜き出しましょう。 (例) 兄は 毎朝, 新聞を 読む。</p>	●文節カード ●文型カード 表面「何が」「どうする」 裏面「主語」「述語」 ●TPシート①
◇主語・述語の働きについて知る。	<p>4 「主語」・「述語」の働きについて考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●(お話3)を読む。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>(お話3) 主語と述語の働き</p> <p>①「何(だれ)が」にあたる文節を「主語」といい、「どうする」にあたる文節を「述語」といいます。</p> <p>②文は「主語」と「述語」の結びつきを中心にして組み立てられています。これを「主語・述語の関</p> </div>	◎用語と働きの確認をさせる。 ◎述語の重要性についてふれる。

<p>◇理解の度合を確かめる。</p>	<p>係」といいます。</p> <p>③ 主語は「何が」のほか「何は」・「何も」・「何だって」の形になるときもあります。</p> <p>④ 述語は文の終わりに来て、意味を決める大切な働きをします。</p> <p>5 文の中から主語・述語を指摘する。</p> <ul style="list-style-type: none"> •〔問題4〕を解く。 (例) 青い海が大きく広がる。 	<p>◎述語を先に見つけると主語が見つけやすいことを知らせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> •TPシート②
<p>◇基本文型について知る。</p> <p>◇基本文型の理解を確かめる。</p>	<p>6 主語・述語の関係には4つの形があることに気付く。</p> <p><練習> 次の文の主語と述語を□でかこみ、あてはまる文の形をあとから選んで記号で入れなさい。</p> <p>(例) 妹が ピアノを ひく。</p> <p>7 基本の文型について知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> •(お話4)を読む。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>(お話4) 基本の文の形</p> <p>主語と述語をもつ文の組み立てには、次の四つの形があります。 (例)</p> <p>① 何が どうする (動作の文) 鳥が 鳴く。</p> <p>② 何が どうなだ (様子の文) 花が 美しい。</p> <p>③ 何が 何だ (説明の文) 僕は 学生だ。</p> <p>④ 何が ある(いる, ない) (存在の文) 本が ある。</p> <p>※ 述語に注意して見分けましょう。</p> </div> <p>8 基本の文型を区別する。</p> <p>〔問題5〕を解く。</p> <p>(例) わたしの教室はたいへん明るい。</p>	<p>◎述語に注目させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> •文節カード •TPシート③ •文型カード <p>◎「どんなだ」と「何だ」の違いを特にはっきりさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> •TPシート④
<p>◇(まとめ) 学んだことを整理する。</p>	<p>9 まとめプリントを記入する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「何(だれ)が」にあたる文節を「□」といい、「どうする」にあたる文節を「□」といいます。</p> <p>文は「□」と「□」の結びつきを中心にして組み立てられています。これを「主語・述語の関係」といいます。</p> <p>述語は文の□に来て、□を決める大切な働きをします。</p> <p>主語と述語をもつ文の組み立てには□の形があります。</p> </div>	<p>◎プリントを回収し学習の様子を知る。</p>

読解④

文意の文の組み立て①

3 土語・方言

〈読解1〉次の文を文節に区切り、下の()にはおなじみの文節を書き入れてください。

赤ん坊はじまじりボールを投げた。

- ①何が ()
- ②何が ()
- ③何が ()
- ④どうした ()
- ⑤どのように ()

〈読解2〉次の文から、A「何が」 B「どうした」ともたは文節を抜き出して下さい。

- 1 足は 無頭、無尾を 蹴む。
- 2 大きな 川が ゆらゆらと 流れる。
- 3 まのう、 霧は いなかから 降る。
- 4 うらが 小さな翼で おぼえる。

A「何が」が B「どうした」

1		
2		
3		
4		

年	組	番	氏名
---	---	---	----

(読解3) 主語と文節の働き

- ①「何が」が「何を」に当たる文節を「主語」といい、「どうした」に当たる文節を「文節」といいます。
- ②文は「主語」と「文節」の結びつきを中心として組み立てられています。これを「主語・文節の関係」といいます。
- ③主語は「何が」のほかに「何が」・「何が」・「何が」の形にはなりません。
- ④文節は文の終わりに来て、意味を成る文節は働きます。

〈問題4〉次の文を文節に区切り、主語には「何が」、文節には「何を」をつけてください。

- A 青い旗が大きく広がる。
- Y 霧だ、と図書館員になる。
- ウ うらがあつ、だけの風で唄う。
- エ 彼ら多くうらわちを唄う。
- オ もら一瞬、少年は力をこめてつなぐ。

4 基本の文

〈読解〉次の文の主語と文節を□でかきまわして下さい。そして、おなじみの文の形をよから書きだして記号で入れなさい。

- 1 妹が ピアノを ひく。 □
- 2 庭の 花が 美しい。 □
- 3 家は 近くに ある。 □
- 4 山と君は 学校の 敷地裏だ。 □

- A 何が ある(いる・ない) Y 何が どうした
- ウ 何が 何が H 何が どうした

《赤いトメテ》主語と文節の働き
 ①「何が」文の終わりにある文節を記号でかきまわす。
 ②文節の働きをきくと、それはどなたの主語を記号でかきまわす。

② (主語) ① (文節)
 庭の 何が きれいに 花が

(読解4) 基本の文の形

主語と文節をよから文の組み立てには、次の四つの形があります。

- ① 何が どうした (動作的文) 馬が 唄く。
- ② 何が どうした (描写的文) 花が 美しい。
- ③ 何が 何が (説明的文) 家は 学校だ。
- ④ 何が ある(いる・ない) (存在的文) 本が ある。

※文節は対称して記号をまわす。

〈問題5〉次の文を文節に区切り、主語には「何が」、文節には「何を」をつけてください。また、文の形を(読解4)の①-④から選び、記号を書きなさい。

- A わたしの絵画はだらくと明るい。 □
- Y フォーンは、その家をおぼえた。
- ウ もの公園は広くて大きい水がいた。 □
- H 霧の旗は今やあつて来た。
- オ ままの旗は、その家をおぼえた。 □

資料⑤

文法 文の種をたて①

年	組	番	氏名
---	---	---	----

5 修飾語句・被修飾語句

〈総題〉 次の文で「」の文節がくわしくしてある文節をトに括弧で囲みなさい。

1 鳥が きれいな 声。

2 目 が きれいな 声。

3 彼は きれいな 声。

4 きれいな 声。

(お話を) 修飾語句の種類
 鳥の きれいな 声。 きれいな 声。 (うしろ・とるまわり)
 「鳥の・きれいな」のうしろ文節を「修飾語句」といいます。
 ①「修飾語句」はあとにくる文節の意味をくわしく説明する働きをします。くわしくそれをしる文節は「被修飾語句」といいます。
 ②文は修飾語句と被修飾語句のつらぎまでくわしく意味をききながら読まれます。これを「修飾・被修飾の関係」といいます。

《赤い・大きい》修飾語句の働き
 修飾語句は「」のうしろがくわしく使われることになっています。
 美しい きれいな 花が きれいな 声。
 「美しい」も「きれいな」も「花が」をくわしくして使います。

(問題5) 次の文の主題は「」、文節は「」、修飾語句は「」をくわしくしなさい。

- ア きれいな 声。きれいな 声。
- イ 大きな 鳥が 泳ぐ。
- ウ 夜 雨が 降りました。
- エ 赤い かわいい 帽子が ある。
- オ 父は 新聞を 読みます。

6 理体修飾語句

〈総題〉

A 彼はアートの本を読んだ。

B おれは音楽の本を読んだ。

C 楽しい本が「音楽」。

D できるだけ早く本が読んだ。

E 感動する本は「音楽」。

○ それぞれ、うしろの本を括弧でかこいでなさい。

A () B () C ()
 D () E ()

(お話を) 理体修飾語句の種類
 修飾語句はその働きによって種類があります。
 ①「何(だれ)」にだたし人・物の名前をくわしく文節や主題の文節をくわしくする修飾語句を「理体修飾語句」といいます。
 ②「えいば」・「はなし」・「えいご」・「うた」は「何(だれ)」をくわしく説明します。

《赤い・大きい》理体修飾語句の働き
 ①おれはアートの文節の「何(だれ)」をくわしくして使います。
 ②位置を動かすことにはできません。
 目 きれいな 声。 → 「花が きれいな 声」とは使えません。

(問題6) 次の文で理体修飾語句は「」をくわしく、それが修飾している文節を でかこいなさい。

- ア 新聞に 楽しい 言葉が 読れる。
- イ 音楽家の 山田君は よく 働く。
- ウ 質問する 人が いない。
- エ あの 山に 登った。
- オ わたしは コッホの 絵を 見ました。
- カ それは お母さんの かばんです。

年	組	番	氏名
---	---	---	----

7 通用修飾語

〈練習1〉

A 風が 吹く。
 B 風が そよそよと 吹く。
 C 風が ひゅらひゅると 吹く。

1 このそれぞれの文の感じはこう感じますが。

A ())
 B ())
 C ())

2 「そよそよと」や「ひゅらひゅると」は、この文編をくわしくしてあげます。

〈説明〉 通用修飾語の働き
 「そよそよと」や「ひゅらひゅると」のように、「この
 ことだ」の意味を表して、文編をくわしく説明する修飾語
 を「通用修飾語」といいます。

《ポイントメモ》 通用修飾語の特徴
 通用修飾語は、自由に位置を移すことができます。
 花が あちらに さいだ。 → 「あちらに 花が さいだ。」

〈練習2〉

A ひろし君と 彼ら合わせだ。
 B ひろし君と まのう 彼ら合わせだ。
 C ひろし君と まのう スーパージと 彼ら合わせだ。

1 それぞれの文をどうみられますか。

A () B ()
 C ())

2 「まのう」と「スーパージ」という文節は、この文編をくわしくしてあげます。

時(いつ)・所(どこ)を移す文節は通用修飾語です。

〈練習3〉

A 父は 早朝 寝む。
 B 彼は とても かわいらぬ。
 C 彼は 学校で 会った。

1 この文の主語と文節をそれぞれ書き出してあげよう。

(主語) (文節)

A —

B —

C —

2 この文はどのままでは読めぬは、まじりません。どんな言葉をお知らせしたらいいですか。

A () B () C ()

① 「何となく」・「何と」の意味を表して、文編をくわしくする修飾語は通用修飾語です。
 ② この修飾語は、この文の意味をまじりなくするのふいふ言葉です。

〈問題8〉 次の文の文節を でかき、それをくわしくする通用修飾語は をひきなさい。 * () は通用修飾語の教です。

A ニスズミが ゆらゆらと ゆれる。(一)
 イ 一時この 彼は 公園に 行った。(二)
 ウ この 彼は だらけん 寝る。(一)
 エ わたしは 夏休みに 感想文を 書いた。(二)
 オ 彼は 母に カートマンを 贈った。(二)
 カ 部屋で かかりさんは おいしそうに ケーキを 食べた。(三)
 キ 彼は 彼は いまより ボールを 投じた。(三)

《ポイントメモ》 修飾語の見分け方
 ① まず、主語と文節を見つけてみる。
 ② それぞれをくわしく説明している文節を見つけてみる。

(主語) (文節)
 寝る → 寝る (通用修飾語)
 あちらに (通用修飾語)

第2回

文芸の文の組合せ①

8 接続詞

年	組	番	氏名
---	---	---	----

〈練習1〉

A 図書館または教室に行きます。
 B 午後ばかり「お勉強」それから寝る。
 C 雨が降った。それで、試合は中止された。

○右の文から、ひたき言葉を選び出してなまじらな。

A () B () C ()

〔用語の〕 接続詞の働き
 「接続詞」は、ひたき言葉のことだ。次のような部
 分をつなげて前後の文意をつなげたりする。
 ①文頭(文頭) ②文と文

〔問題1〕 次の文書から接続詞を□でなまじらな。

くちは、運動がななな「お勉強」あわてて体の
 回まを返した。そして、自分の運動がななな「お勉強」
 を返けるよ、すくすく「お勉強」戻りかかたり、戻りかかたり戻り
 くるよ。ところが、この「お勉強」はななな「お勉強」。

次の文を接続詞を戻して、二つの文に繋ぎ直してなまじらな。

1 雨が降ったが、サッカーの試合は続けられた。 ()

2 きはく「お勉強」「お勉強」お勉強「お勉強」 ()

「雨が降ったが」「お勉強」「お勉強」の「お勉強」「お勉強」
 文は「お勉強」後の部分全分は繋ぎ直してなまじらな。接続詞を
 つなげなまじらな。後の部分の原因・理由・条件はなまじらな。

〔問題2〕 次の文書の接続詞の部分に——をなまじらな。

ローニヤの休日が終わるよ、運動所はななな「お勉強」はななな「お勉強」
 の手を握りられないので、お勉強はななな「お勉強」以上はななな「お勉強」
 なまじらなはななな「お勉強」。

9 独立語

〈練習〉

A 真一 「おれ、お勉強がななな。」
 B だけし 「お勉強、お勉強がななな。」
 C まさる 「お勉強、お勉強がななな。」
 D 真一 「お勉強を返したお勉強、これはお勉強の小説だ。」

○右のそれぞれの——部分には、問題1のどのひたき言葉がなまじらな
 られてなまじらな。

A () B ()
 C () D ()

〔用語の〕 独立語の働き
 「独立語」は、問題1のひたき言葉をなまじらな言葉をつな
 げなまじらな。文の独立語は、他の文頭との繋ぎがなまじらな
 独立語です。働きは次の四つに分けなまじらな。
 ①感動(お勉強・お勉強)
 ②呼びかけ
 ③応答(お勉強)
 ④指示(お勉強からなまじらな「お勉強」)

《お勉強》指示の働きの説明がなまじらな

「お勉強を返したお勉強」、これはお勉強の小説だ。
 (お勉強からなまじらな) (指示語)

※お勉強からの文には、必ずお勉強を返してなまじらな。

〔問題1〕 次の文の独立語に——をなまじらな、それが、感動・応答・呼
 びかけ・指示のどの働きをするかなまじらな。

A お勉強、お勉強、お勉強 ()

B お勉強、お勉強 ()

C お勉強、お勉強、お勉強 ()

D お勉強、お勉強、お勉強 ()

E お勉強、お勉強、お勉強 ()

F お勉強、お勉強、お勉強 ()

力だめしテスト

年	組	番	氏名
---	---	---	----

1 次の文書はいくつの文でもまっていますか。

二人がその機はずりこんだ。たちまち風までひたしてしまふ。風吹部の感じとさうでなければならぬ。中央部ならだう一人一人のさうでしまひます。巨体はローンをかきかた。こうして作業には、全量が傾れこんだ。

2 次の文を文節に区切り、その数以下の () に書きなさい。

① わしは、姉さんがたくもくらだ。 ()

② ためしにこの田んぼをなうて書を雑誌の中に入れて。 ()

3 次の文の主題の文節には「」、発語の文節には「」をつけなさい。

① 送るの音が大きくなる。

4 ② ぼくがあとで事情を説明する。

③ 友達のゆきよさんの家でわたしは三日ほど遊んだ。

4 次の文の形をよから読み、記号を書きなさい。

① 夜がききよははとも楽しい。

② いもうちは、母を置いて出かけた。

③ トリスはふんばに寝まれているコネーだ。

④ 教室のノートがくさの土にある。

ア 何か ららもる
 イ 何か める(いる・なら)
 ウ 何か らんばだ
 エ 何か 何だ

5 次の文から、発語の文節を選び、記号を書きなさい。

① 父は母に相談した。

② 親友から 娘はかきが せいらだ。

③ 兄の トリーは 機じかただ。

6 次の「」の文節は、Aまたは発語節 Bまたは発語節のどれかを記号で書きなさい。

① えんがわだ 子むが 三ひき れわてらる。

② その 靴箱の チョークを かしてたさい。

③ 終会が 三冊から 始まった。

④ おま理は 合はの じルが だつた。

7 次の文の発語節に「」をつけなさい。

① 花がをき、まだ、風が吹く。

② コーネー、それとらる袋にしまふ。

③ 大塚に行つた。けれど、大塚は豊ならだ。

④ わしはまた小津母だだが、トリーは、この調査所の手だしをするもつにはつてた。

8 次の文の独立節は「」をつけ、その働きをよから読み、記号を書きなさい。(記号は全)

① 先生、質問があります。

② まる、すばらしい遊だつた。

③ ナイト、これはお題をたかする本です。

④ はい、明日出席します。

(ア 感動 イ 呼びかけ ウ 発語 エ 懸念)

①	②	③	④
---	---	---	---

得点 25

VI 研究の成果と今後の課題

1 成 果

- (1) 文法の基本的指導事項について、小中の系統を調べることができた。
- (2) 生徒の実態に基づいた学習指導案と学習プリント資料を作成した。

2 今後の課題

- (1) 作成した学習指導案を実践し、指導目標に照らした学習過程・資料の改善をしていきたい。
- (2) 基礎的な文法学力を定着・発展させていくためには、取り立て指導とその補充学習まで含めた時間確保の問題が残されている。
- (3) 取り立て指導の時間で得た知識をそのときどきの理解・表現教材でも生かせるような単なる知識で終わらせない工夫をしていきたい。

おわりに

これまで苦手意識が先にたち、思うように展開ができなかったのが文法の授業である。今回の研修で理論研究と教材研究を深めることができた。わずかだが指導方法の糸口がつかめたようである。この4カ月間は、これまでの実践を振り返るよい機会であった。

言語事項の指導では、何よりもまず、指導者の側に言語要素や法則性について、しっかりした知識と理解を持つことが要求される。教師は常に自己の言語感覚を養う努力をしなければ、生徒たちに真の言語能力をつけさせることはできないということを痛感させられた。これからも研究をさらに深め、生徒たちに還元できるようにしていきたいと思う。

最後に研修期間中直接ご指導いただいた諸見里稔指導主事をはじめ、浦添市教育委員会の各主事、浦添市立教育研究所の方々に深く感謝の意を表す。

<主な参考文献>

改稿 日本文法の話 第3版	阪 倉 篤 義	1989, 11	教育出版
「言語」教育の理論と実践の課題	全国大学国語教育学会	1987, 8	明治図書
新学習指導要領指導内容系統表	藤 原 宏	1990, 10	明治図書
基礎・基本をおさえた国語指導	長 尾 高 明	1989, 10	東京書籍
中学国語の授業(文法・漢字・語句)	岩 田 道 夫	1990, 2	民衆社
国語科学習状況の評価を生かした指導事例	小林一仁・井上輝夫	1982, 9	明治図書